

# 小説「鳥」の指導

—— 状況認識の把握を中心にして ——

菅 野 良 三

## 一 はじめに

高校生たちは現在の自分たちを、「自分たちは疎外されている」「三無主義」「受験戦争による灰色の生活」といった既成の言葉で規定し、一つのレールに乗っかって現実の状況を見つめ、その中で自分の生活や存在を省みることを避けているようである。「反面、現実の流れに棹さして、自分の置かれた状況に全く目を開かないで生活している生徒もまた多くいる。いずれにしても自分の周囲に対して目を開き自分自身の本当の姿を捉え得ていない現実がある。

このような実態を国語教育を通してどのように切り開いていくか。野地潤家先生は「人間の生きかた、人生のありよう、社会生活のさまざまについて、問題意識をよびさまされ、それらの主題を中心におのおのの思いを深めていく。自己を見る目を開き、自己の生活に内省の目を向ける。こうしたことの機縁となる点に、国語教育において近代小説を学習していく、中心意義の一つがある。」（戦後小説の教え方」磯貝英夫・野地潤家編著・右文書院刊）と指摘されている。近代小説は人生への認識の目を開く窓ともいえる。この趣旨にそって今回は小説「鳥」をとりあげることにした。この小説は「現代の状況に生きる人間が、自分の生きていく状態を、その内

部に深くおりていって、現代社会の反映として生み出されてくる独特の意義を発見させる力をこの小説は持っている。」（三省堂・教授指導書）とあるように、自分の内奥にある世界・意識を呼びさます効力を持っている。そして、社会と個人との関係、内部と外部との対応がどのようなものであるか、自己存在とは何かを認識する上で意義があると思われる。

しかし、「現実の単純な客観的描写でなく、想像の世界に媒介され、意識の奥に隠されている部分をえぐり出す文体で書かれている。」（同右）だけに、また、作者自身の言う「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考へることが、一貫した僕の主題」であるだけに、この作品のもつ象徴性を生徒がどこまで読みとることができるか、相当に困難な作品でもある。

## 二 学習過程

- (1) 教材 「新版 現代国語 改訂版3（三省堂）単元・文学の方法 「鳥」（大江健三郎）」
- (2) 対象生徒 普通科三年（構成員 一クラス四五名、男女はほぼ同数）
- (3) 目標

(7) この小説の象徴性(寓意性)はどのような意味をもつかを考  
えさせる。

(8) 現代人の置かれている状況―社会・自己―への認識を深めさ  
せる。

(9) 小説の手法・文体について理解させる。

#### (4) 指導の方法

従来とってきた第一次感想、読解、第二次感想といった手順を今  
回はとらないで、初めから順を追って表現を押さえながら読み進め  
て行く。読みとったものを書いてまとめる、そして発表するとい  
う、読み↓書き↓発表、という方法を中心とした。従って勢い「書  
く」という作業が多くなったが、これは、読みを確かめ、深める方  
法としての学習形態でもある。なお必要に応じて、二―三人グル  
プによる相互点検等の方法も利用した。

#### (5) 学習過程

前記の目標、指導方法をふまえて、次のような「学習課題」を作  
成し、それに沿って授業を実践した。

#### (7) 学習課題

設問1 ページ20上―ページ21上9行について次のことを整理す  
る。

① この段全体から受ける感じ(印象)はどうか、個々書きにし  
てみよう。

② 作者は△鳥たち▽と「彼」と△現実▽とはどのような関係と  
して設定しているか整理してみよう。

③ 感覚的表現(視・聴・触覚)とその効果について考えてみよう。

う。

④ 書き出し文について考えてみよう。

設問2 ページ20上10行―ページ25上19行について次のことをま  
とめよう。

① 次の表現の意味を考えよ。

a ページ20上18行「充実した沈黙」

b ページ20上7行「まじめな、ほとんど日常の必要事を検討  
するような態度を示そうとした」。

c ページ20下11行「わたしは事実をお聞きしたい」

d ページ20上10行「男は重々しく考え込みながら言った。」

e ページ20上9行「男は夢見るようなはるかな目をし」

f ページ20上12行「鳥たちとほくとの結びつきには、いくぶ  
ん性的なものがありますね」

g ページ20上19行「真の知己を見つけ出した思い」

h ページ20下19行「男は次第に雄弁になって行った」

i ページ20上10行「そのことは彼の心を硬化させた」

j ページ20上17行「微ほろの生えた靴」

② 「男」はどのような人物として描かれているか。また「彼」  
の世界へどのようにして入り込んでいったか―彼の心情の変化  
とあわせてまとめよ。

③ この段で母親の果たす役割を考えてみよう。

設問3 ページ20下1行―ページ21下5行について次のことを整理  
しよう。

① 次の表現の意味を考えよう。

a ページ205下3行〜7行の表現の効果について考えよ。

b ページ206上3行〜12行について、以前の「彼」と比較して、なぜこのように思うのか、まとめよ。

c ページ208上19行「自分自身については深く絶望している」のはなぜか。

d ページ208 10行〜ページ209上9行について、今「彼」の置かれている状況と「彼」の心情をまとめよ。

e ページ209上17行「扉を荒々しく引き開けて、突き出されたがんなじような頭が男をうかがった。」の効果について。

② 「男」は病院についてから「彼」にどのような態度をとったか。また「男」に象徴されるものは何だろうか。

③ 「彼」の△鳥▽たちに対する考えはどのように変わっていったか。状況とかがわらせてまとめよ。

設問4 ページ210下7行〜ページ212下8行について、次のことを整理しよう。

① ページ210下15行〜ページ211上8行「雨があがったあと、すばらしい速さで雲が切れ〜回復することができないような気がした。」について、a自然描写の効果、b比喻表現の意味を考えよ。

② 「彼」にとって△鳥たち▽はどのような意味をもつようになったのか。(全体を通してまとめよ)

③ 「彼」はどんな生活をするようになるのだろうか。

④ 母親の役割りは、(本当に気違い女なのか。)

設問5 この小説はどんな状況を描こうとしているのか。(感想・

意見をまとめて書きなさい)

設問6 現在の君たちを取りまいている状況について(自分の置かれている状況について)考えてみよ。

設問7 君にとって△鳥▽とはどんなものか具体的にあげてみよ。

設問8 この小説の主題は何だろうか。

設問9 この小説の特色はどんな点に見られるか。今までに読んだ小説と比較して考えてみよ。

なお参考資料として生徒に与えた補助プリントは次のものである。

1 大江健三郎略歴

2 大江健三郎全作品6(新潮社版)付録No.1「時代から超時代

へ」石原慎太郎

3 大江健三郎全作品2(同右)付録No.3「最近の大江健三郎」

安部公房

4 大江健三郎全作品1(同右)付録No.2 平野 謙

5 高等学校国語科教育研究講座 第四卷 (有精堂)「大江健三郎『鳥』」見崎徳弘

(イ) 授業実践

前記の学習課題を中心にして授業を実施した。その大要は次表のとおりである。

時	学 習 活 動	留 意 点
1	<p>学 習 内 容</p> <p>大江健三郎について簡単に説明</p> <p>設問 1①②③④ について、黙読してまとめる</p>	<p>書くこと</p> <p>別紙に書く</p> <p>一・二年時の小説教材学習実態調査</p> <p>冒頭部分の効果・感覺表現△鳥▽と「彼」と△現実▽との関係をはつきりつかむ</p> <p>作者の想像力・状況設定をつかむ</p> <p>任意に指名</p>
2	<p>設問 1 について生徒発表</p>	<p>別紙に書く</p> <p>三段落に分けて文章化する</p> <p>「男」の言動を引用する</p> <p>「彼」の心情の変化を押さえる</p> <p>対話のテンポ、たくみさを読みとる</p> <p>机間巡視を通してあらかじめ発表者を選定する(上・中程度のもの)</p>
3	<p>設問 2① a ~ j の表現的意味を検討する</p>	<p>別紙に書く</p>
4	<p>設問 2②③をふまえてまとめた文章を交換して添削をしよう</p>	<p>別紙に書く</p>
5	<p>設問 2②③ 生徒発表</p>	<p>別紙に書く</p>

6	<p>設問 3① a ~ e の表現的意味を検討する</p>	<p>任意に指名とする)</p> <p>「男」の描き方、設定の意図を読みとる</p> <p>△鳥▽の「彼」にとっての意味について考える</p>
7	<p>設問 3②③について整理する</p>	<p>別紙に書く</p>
8	<p>設問 3②③について生徒発表</p>	<p>別紙に書く</p> <p>「やり切れない生活」をふまえて想像してみ</p>
9	<p>設問 4①②③④について整理する</p>	<p>別紙に書く</p> <p>△鳥▽・「男」・△現実▽「彼」との関係を通して作者の意図・(主題)・小説的手法を理解する</p>
10	<p>設問 5 についてまとめる</p>	<p>別紙に書く</p> <p>自分を取りまく状況を認識する—今の自分に目を向けて見つめる</p> <p>単なる精神異常者の話として受けとらない</p> <p>一九五〇年代後半の状況と作者の認識のしかたを理解する(補助資料参照)</p>
11	<p>設問 6 7 8 9 についてまとめる</p>	<p>別紙に書く</p>
12	<p>設問 5・6・7・8・9 をめぐって討議する</p>	<p>別紙に書く</p>

<p>○ 現実の状況認識と生き方について考える</p> <p>○ 小説の方法—象徴的方法—大江文学の特色について理解する (補助資料参照)</p> <p>○ 討議は自由に意見を發表させるために生徒の司会者一名を選出</p>
---

(c) 生徒の反応

まず、冒頭部「数知れない鳥の羽ばたきが、彼を目覚めさせた。—ひっそりと暮らしてきたのだ。」についての①印象②状況の設定について生徒は次のように指摘する。

①印象

(a)	どんな点に	どのように	その効果は
	<p>○ 外側の人間どもは、</p> <p>○ 頭の皮膚の内「むくむく」という表現が「眠け」を如実に側をむずがゆピンとこない。だが眠けを伝え、読者にうなぐし熱っぽく形で捉えた発想は、素晴らずさせる。</p> <p>○ 外側に立ちふ</p>	<p>この男が、自我という殻の男の現状を設定し中に閉じこもっていることである。</p> <p>が、うかがえる。</p>	<p>その効果は</p> <p>現実に対して一種</p>

(b)

<p>さがる。</p> <p>「数知れない鳥の羽ばたき」が、彼を目覚めさせた」という異様な状況。</p> <p>「あいつらは外側の人間どもはおまえたちを見る目、おまえたちの羽ばたきを聞く耳を持っていないんだ。」</p>	<p>初は本物の鳥がいるのか。主人公の立場が普通でない。不安な感じ。</p> <p>「無数の鳥の羽ばたき」というものは、何か、人間を駆り立てるものがあるのかも知れない。「彼」が「現実」—他の人間—を嫌っていることがわかる。</p>
<p>られる。それとともに現実の恐怖感さえ湧かという、漠然としたものにせる。意志・主体があるようで恐ろしい。</p>	<p>(男1)</p>

②状況設定

作者は△鳥たち▽と「彼」と△現実▽をどのように設定している

か、整理してみよう。

(a) △鳥たち▽彼の思い通りになる世界（自我の殻）を代表するもの

「彼」：世間から疎外された男

△現実▽彼の思い通りにならない世界

柔かく繊細な感情をもっていない世界 (男1)

(b) △鳥たち▽は柔らかく繊細な感情を持っていて「彼」を受け入れ、そして「彼」もまた△鳥たち▽を保護してやるといった、持ちつ持たれつの関係。

△現実▽は「彼」の思い通りに動かない。ともすれば「彼」を無視し、押しつぶそうとする。だから「彼」は△現実▽とのかかわりを捨て△鳥たち▽と暮らしている。(女1)

ほとんどの生徒は、この小説の主人公「彼」の置かれている状況の異常さ、不気味さ、現実ならぬ現実、疎外されて自己の世界に閉じこもる自閉的・孤独な生活者の姿を読みとっている。そして△現実▽の社会とのきびしい対決、社会の拒絶の状態を指摘する。そして想像の△鳥たち▽との閉ざされた一年以上ものひっそりとした、異様な生活を把握する。

③そして△現実▽を代表する「男1」については、次のようにまとめている。

設問3 ②1・2段を通して、「男」は何どんな人物として描かれているか、また(向作者の意図(男に象徴されるもの))は、

男はどのような人物として描かれているか

作者の意図・効果

一段 誠実で、熱情に満ちた男であり、彼の心を聞くことのできる人間的な様子をした男として描かれている。しかも、彼の心をひきつけ、知己であるといった感情を抱かせるほどの役者である。

また、彼にとっては、閉塞された世界に救いの手をさしのべてくれる救世主的な存在であった。

二段 誠実そうな仮面をはぎとり、一変して弱者をいたぶる者となる。彼に対して、憎悪の念すら抱くといった変わりようであり、彼を幸福の絶頂から絶望のどん底へ突き落とす暴君に姿を変える。

一段 今までやって来た人間と違って、実に謙虚でどこもなく、彼に余裕を与える。また、△鳥たち▽についても、まじめに取りくみ、理解をしようと努力している。

彼が男に友情を感じずにはいられないような、心の中をすべて聞いて見せてもかまわないような、人間的な人物として描いてある。

二段 彼のことをまるで人間扱いしていない。冷淡で、暴力をふるうことになんのためらいも感じない。

効果 男が彼を真切ったときに読者に与える衝撃が大きい。(女1)

効果 男の二面性 (男1)

意図 男が正体をあらわしたとき、あれほど彼をひきつけた、態度や言動が、実は、すべて計算しつくされた上でのことだったということ、読者に印象づける。

「男」について作者の計算された役割り描写を指摘している。

④ △鳥たち▽に対する考え（意味）の変化

設問3 ③ 「彼」の△鳥たち▽に対する（意味）考えはどのように変わったか、状況とかわらせてまとめよ。

状 況	△鳥たち▽に対する考え
<p>彼は男の研究所へ、△鳥たち▽が自分独自のものであるかどうか、試しに行くことにな。やがて、車の中に鳥たちがやってくる。</p>	<p>△鳥たち▽がやってくるかどうかは別にし、△鳥たち▽に対する信頼は、ゆるぎない。そして△鳥たち▽が現れると、勝利にた喜びを感じ、幸福に感じ、自分はどうも遠い国へ行っても一生孤独を味わわずにすむだろうと考える。また、△鳥たち▽を持っていない他人を見て、自分を加害者のように思う。</p>
<p>病院に着き、にわかに男の態度が変わる。驚いて抵抗する彼に、男はなんのためらいもなく暴力を使って、彼を病院の中へ引きずりこむ。彼は必死に△鳥たち▽を呼ぼうとするがやってきたのは存在感の薄い二羽の鳥。しかしそれも、すぐに消えてしまう。</p>	<p>やっこのことでやってきた、存在感の希薄な二羽の鳥だが、いったん現れたとなると、今度はその鳥自体が、彼に白々しい、むなしい感情を引き起こした。それは彼をなぐさめるどころかいらさせ、屈辱感さえ呼び起こす。こいつらがいてもなんにもならない。つまらない子供だ。消えてしまった小鳥たちをもう一度呼びもどす気力もわかない。もはや、彼は、△鳥たち▽に対して完全に信頼感を失ってしまった。</p>

彼は男にひどいけがをさせられ家にもどって。今度は母が△鳥たち▽を信じている。母が△鳥たち▽を信じ始めたとき、彼は母のことを気遣い女とみなした。

⑤ これからの「彼」の生活について  
設問4 ③ 「彼」はどんな生活をするようになるのだろうか。  
(女1)

(a) 鳥の幻影から逃れることのできた彼は、気遣い女となった母親にまといつかれて、またも、閉塞された世界へ引き込まれてしまう。この状況から逃れる術もなく自らの安らぎを求めるときもできないで暮らしていくことになるだろう。  
(男1)

(b) 他人のにおいに満ちた現実と自分とを隔離する唯一の方法であった幻覚的な鳥の存在も消え、なんらの自己主張もできない現実と直接接触して生きねばならない。いわば彼にとって生けるしかばねとも言へるやりきれない生活が彼を待っている。  
(男2)

(c) もう決して人間を信じようとしないうら。そして△鳥たち▽は彼にとって、どうでもよいもの——むしろ、ひどくいまわしいことを思い出させる、過去の汚点となってしまった。だから彼は、今度は本当にただ一人で、暗い部屋に閉じこもって暮らすのだ。△鳥たち▽のことについて彼にいろいろとしゃべりまくる母を避けて。彼の生活の唯一のなぐさめはなくなってしまう。やりきれない怒りが、いつしか、果てしない虚無に変わ

わるかもしれない。

(女1)

(d) 彼は信じていた男にも裏切られ、もう何も信じられなくなる。外側の人間に常に圧迫され、それに対し戦う力がない。幻想の世界にもすめなくなつた今、たよるものもなく、不満ばかりつるが、無力のまま屈辱に満ちた生活を送っていく。(女2)

(e) 今まで、自分を理解してくれていた鳥が存在しなくなり、その上、自分の母親は、以前の自分の様に、気が違つてしまつたので、自分一人の孤独な世界で、以前の自分の姿を母親の中にいやおうなく見なければならぬような、絶望的な生活を送ることになるだろう。(女3)

のように、絶望的な孤独の生活を予想する。

⑥この小説に描かれた状況については

設問5 この小説はどんな状況を描こうとしているのか。(感想)

意見をまとめて書け)

(a) 現代社会では、自己疎外の意識に悩む者は数多い、その現代社会の病幣とも言うべき問題を、主題にすえて、文章をつづつたのだと思う。あくまでも、推察にすぎないが、鳥は現代人にとって、社会という大きな殻の中で、自らの憩いを見出せる場つまり、家庭ではないだろうか。当今、話題にのぼるマイ・ホーム主義が、それだ。また、男は、個人に対して、時には陽の顔を見せ、時には陰の顔を見せる社会そのものであると思う。しかも、その底流には、非力な一人一人の人間をなんとかして、欺いてやろうという意図が、うかがえる。もつと、せばめて言えば、男は国家権力そのものである。大江健三郎は、鳥と

男を使って、病める現代社会の現況を暗示しているのだと思う。(男1)

(b) この「彼」は現実にはもはや青年の理想を見い出すことの不可能な状況におかれている。公の立場での自己主張が許されないのだ。そこで自然、逃避的な方向に走つてしまい、自分自身の中で自己を確立しようとする。そうすることの正当化の理由なり手段なりが△鳥▽の存在である。空想上の△鳥▽とともに、自由な自分だけの生活を始めるが平和な状態はいつまでも続かない。

「彼」をとりまく周囲は「彼」だけが勝手な生活をすることを許すはずはない。現在の大勢を決した社会は決して異端者を認めず、その人間を実社会の一部に組み入れていこうとする。その役割を果たすのが、この場合、「男」である。

「男」は現実社会を集約的に象徴しており、すべてこの世は虚飾と虚偽に包まれていることを示している。また「彼」は現実非常に警戒しているのに、それでもなおかつ、現実に欺かれていくことは、実社会をそのまま反映しているといつてもよい。△鳥▽はすなわち「彼」であつて、あれほどまでに密接な関係だった「彼」と△鳥▽(現実では自己確立)が「男」の暴力(現実では高度に発達した文明社会)によつて一瞬にして葬り去られたことは、現実社会の人間疎外と同じ現象であらう。

そして△鳥▽を失つた「彼」のその後の生活は目に見えていゝ。望まなくとも現実と接し、さまざまな社会悪を眺め、無気力、無感動になつていくだろう。心に大きく穴をぼっかりあけたままで真の自分を見失つていくだろう。

要するにこの小説は、現実の人間疎外という現象に対して、

反抗を企てた青年が、やはり現実には吸収されていくという現実のやりきれない宿命を△鳥△という特異な存在で象徴的に描こうとした作品ではないだろうか。私はそう思う。(男2)

(c) この小説は、人間のおかれたきわめて不安定な状態を、一人の青年を通して描いている。彼はおそらく自我が強かったのだろう。さまざまな人間関係の中で、「自分の存在」に対して悩み、傷つき、失望するうち、いつのまにか、自分の殻に閉じこもってしまった。△鳥たち△は、そんな彼に対して、ただ受動的であったために、彼の唯一のなぐさめとなったのだ。

私はこのようになった彼に共感のもてるところが、ずいぶんある。いや私だけではないだろう。前にも述べたように、人間はみんなきわめて不安定な立場におかれているのだ。程度の差こそあれ、すべての人間が、彼のように物事を見つめ、考えることもあるに違いない。そう、あの舗道を歩いていた男たちや女たちも、子供たちも、彼の兄たちも、彼から服をむしりとった、病院の男たちも、そしてあの男にだつてさえも。ただし、あの男は、ちょっと、ひとすじ縄ではないか。広い世界だから、ああいう男も、まあいるだろう。ああいう類の男は、必死で自分のおかれた不安定な立場を無視しようとするのだ。そして他人を攻撃したりすることによって、自分の立場をなんとも思わなくなるようになる。それを自分の力だと錯覚する。だからますます、他人に対して、冷酷になれるのだ。彼の△鳥たち△を奪い、ふみにじったのも、実は、△鳥たち△が彼に対してどんなものであるかを、ちゃんと知つてのうえでのことであつたのかもしれない。

(d) 彼は△鳥たち△を奪われてしまった。△鳥たち△がなくなつた今、他人と、交わるのできない人間関係の中に△鳥たち△を見い出すのできない彼は、いったいどうなるのだろうか。なんて恐いことだろう。「おれはこのやりきれない生活を少しの幻影もなしに暮らしていくことになるのだろうか。」誰もがなる可能性のある状態だけになおさら恐しい。

私は、誰もが、七羽くらの信頼できる△鳥たち△をもつて暮らしていくのが、よいと思う。(女1)

(d) 人が人をだましたり、だまされたりするのは、どういふことなのか。心理作戦的なところがあるが、人間の心の複雑さを感じる。彼をだますために偽善的態度で接し、わがものになつたら、徹底的に虐待する。恐ろしい行為である。しかし、こういうことは世の権力者たちが、よく使う手である。だますほうが悪いのか、だまされるほうが悪いのか。だまされたほうは、ひどくショックをうける。それは偽善が徹底していればいほど、大きいショックをうける。そして、だまされたことの屈辱・自己嫌悪・絶望・人間不信にかられる。なかなか立ち直ることができないだろう。この小説を読むと、「うまいことばに誘われるな。」というような、懐疑の精神を教えられるようだ。でも人を疑うことは悲しいことだと思ふ。私は、だますよりだまされる方がいい。

暴力によって服従させられるのは、人間として屈辱だと思ふ。肉体は屈しても、精神は屈せずということばがあるが、彼の場合、一心同体だと思つていた△鳥たち△が現れなかつたことで、よけいに屈辱感を感じたのだ。今まで信じていたものが

一挙にくずれざると、考え方がまったく変わってくる。△鳥たち▽のことを汚らしい空想と考え、△鳥たち▽の存在を感じる母親を気遣い女とさげすむ。幻影から覚めた彼は、現実の世界で、さめた目をもってくらししていくだろう。

(女4)

描かれた状況をみごとに捉え得た生徒もいるが、大半の生徒は一時社会から逃避し、自分の殻に閉じこもっているが、それも現実社会は許さず、再び現実にも引きもどされて生活せざるを得ない人間の弱さを描いていると受けとめている。そしてその現実の中で前向きな生活、一つ一つのことがらを乗り越えてゆくべきだという希望的な意見もでてくる。

① 主題について

(a) 現代社会の閉塞的な状況つまり一人／＼が、自己の殻に閉じこもると言った自己疎外の状況をとらえている。

(男1)

(b) 一人の人間が、ある事実に基づき、自己や現実が目覚める。そして、彼の前に立ちふさがった偉大な現実の存在に空想、幻影からひきもどされ、やりきれなさを痛感する。

(男3)

(c) 現実から逃避して幸福に暮らしていた青年が、無理やり、現実につれもどされ、すべてを奪われて、それでも、生きていかなければならない。現実には彼に対して非情で、常に彼をとりかこんでいる。そしてその事実はずべての人にあらはまる。そういった「不安感」を描いている。

(女1)

(d) 現代人の生き方 鳥にしか自分の考えをたくせない現代人の

弱さ 現世への反抗 現代人のおいつめられた状態 どこへ行ってもぬけ出せない外部の考え方の大きさと苦しきさの中の人間の状態

(女5)

なお「鳥」の主題については「不毛の現代に生きる孤独な魂の絶望的な叫び」(高等学校国語科教育研究講座・四巻有精堂刊大江健三郎「鳥」・見崎徳弘)、「『鳥』は自閉症状をとりあげて、管理社会のなかでの、ゆきどころのない閉塞感(戦後小説の教え方・磯貝英夫・野地潤家編右文書院刊「戦後小説教材の性格」磯貝英夫)といった指摘がある。生徒はさまざまに、生徒なりの読みとり方をしている、第12時の全体討議はかなりにぎやかであった。

② 状況認識について

授業目標の一つでもあった状況認識(「自分の置かれた状況認識」)を生徒たちはどのように持っているのか、次に幾つかの例を示す。

(a) 学校という一つの社会に属している。そこでは、自分の我を通すだけでは話にならない。つまり、それ相当の束縛もあるし、人間関係も決して単純とは言いきれないと思う。だが、この小説の中の彼のように、部屋の外は、他人の臭いをこびりつかせているとは思わない。それは、社会の最前線に生きたことがないので、ぬるま湯につかっているいい気になっているからかも知れないが、少なくとも僕自身に関しては、友人に他人の臭いをかいたことは全くない。結局のところ、学校という、わくにはまっけていても、別に閉塞された状況とは思っていない。(男1)

(b) 何の才能があるのかもわからず学校教育を受けテストのたびに一喜一憂し、みんなが大学へ行くから自分も行くという風に、ただ流されるままに生きていくだけの生活。僕には、いや私にはみんなより優れた何かがある、とか、この事はできないけどある一つの事については誰にも負けないとかいう強烈な個性を持った人間がまわりにほとんどいない状況。こんな状況の中でいつも僕は不安になり、悩ままよってしまふ。どうして日本という国では「人並み」という言葉が最も幸福ということになるのだろうか。人とちょっと変わったことをすればみんなには白い目で見られ、近所ではいやなうわさがたつ。白い目やいやなうわさを気にしないだけの強さを持れば良いのだけれど仲々それも難しいことだ。  
(男4)

(c) マイペースでは生きていけない。制限が非常に多い。かといって「彼」のように徹してしまふ勇氣はない。とけこめない部分もかなりある。まだ彼のように鋭く現実を感じたことはないが、その可能性はある。  
(女1)

(d) 私の置かれている状況は、極めて不安定なもので、危いものである。それは完全に受け身的であって能動的なものではない。昔から与えられてきて、築かれたものの中に今私はいる。守られて、たおされる、みじめさを知らない。知っているのは甘えだけといつてもいい。

ある時は、その状況に満足しきっている。その反面、脱け出した野心からられているのも確かだ。今の状況は決して悪い

ものではないけれども、もっと能動的で自立されたものでありたい。  
(女6)

(e) 私達のまわりは、この『鳥』の中の状況と変わらず、各個人に理解を示すようなものでなく、上から又は外側の要求に個人の方を合わせなければならぬ状態である。学力偏重主義であり個性はみすてられがちである。教育制度の中にもそのような傾向はみられる。そして、受験競争のうずの中で人間性無視の学習を強いられている。  
(女2)

生徒の現状を捉える捉え方はさまざまである。いずれにしても現実を鋭く深く、また広い視野でみつめ、捉え、創造的な生活を樹立していく窓を国語教材を通して開いて行きたい。

### 三 おわりに

書いてまとめることを授業方法の基本においたため、合計12時間という短編小説の扱いとしては長時間を要した。しかし、生徒たちは予想以上に真剣に取り組んで、毎時間のメモ・まとめにも積極的であった。生徒の授業感想では書くことの多さに少なからず閉口し、「またか」という感じを持ったことを告白している。にもかかわらず、国語の授業全体についての感想では、最も印象に残っているのは「鳥」であったとする生徒が多いのに驚いた。しかも、読んで書くという作業の多さに「とまどい」「反発・共感」を混ぜながら授業を受けてである。録音をとり、生徒が司会をした最後の話し合いが活発であったのも、書く作業を通して自分の考えなり、受け

とめたものを整理、反芻していたからでもあろうか。

さて、「鳥」はなかなか難しい教材である。表現（用語など）は格別理解困難なものはない。しかし、「明確に計算された虚構の中へ、現代を象徴的に封じこめ」（前出・見崎徳弘）られたものをどのように読みとって行くか。分析・総合を有機的にするには。ややもすると生徒は、自閉し気狂い、理想と現実との対決による理想の崩壊、などと一面的にとらえがちである。また、「男」の役割（象徴性）は理解できるものの、△鳥▽の存在を失った直後の「彼は△鳥たち▽についても決して考えてはいなかった。あれは汚らしい空想に過ぎない、おれが汚辱に満ちている時支えにならない。『おれは、あのいまましい鳥どもから縁を切ったところだ。』と彼は言った。」という部分の解釈でつまづく。生徒は「彼」が今まで閉塞した、孤独の生活から新しい生活へ意志的・主体的に出発するものとして受けとめる。しかし、最後の小段落の「彼」のやりきれない生活云々を読んでとまどいを生じる。そして、感想には「強く生きるべきだ」となり、「閉ざされた世界から現実の（開かれた）世界へ引き出され、唯一の心のよりどころを失って、空虚なやりきれなさを抱きながら生きていく姿」の読みとりにはなかなかいさぐちにくい。結論が示されているだけにイメージ化が難しい。

母親の「気狂い女」論争も生徒には骨が折れる。

授業の方法・組み立てにも反省すべき点がある。今回は第一次感想を事前に書かせなかったが、最初にこれを提出させて、生徒の読みとりの実態を分析して入って行くのも有効である。また、今回は計画をたてたものの、時間の都合で中止した比較読みの方法もあ

る。同時代作家の作品をいくつか選んで、主題・状況（主人公をとりまく現実とそれへのかかわり方）構成・表現などを比較して読む。そうすることで、それぞれの作者の捉え方―文学の方法―を通して状況認識を深めることになると思われる。

いろいろな方法もあり工夫もいる。今後、教材研究、作家研究をより密度の濃い、深いものにして実践していきたい。（一九八〇・三）

（広島県立福山誠之館高等学校教諭）